

健康通信

咳喘息（せきぜんそく）

呼吸器内科部長医師

高田和かずと外

咳が長引くという経験をされた方は多いのではないのでしょうか。風邪の咳が続くこともありですが、咳が3週間以上続く場合は他に病気が潜んでいることもあります。長引く咳の最も多い原因は「咳喘息」といわれています。空咳が症状となる気管支喘息の一種です。喘息という特殊な病気のように聞こえるかもしれませんが、喘息の特徴となる気道過敏性（気管支が刺激に敏感な状態）は症状が全くななくても約20%の人にみられるものです。気道過敏性は気



管支の炎症から生まれませんが根本的な原因はまだはっきりしていません。この「気管支が敏感な状態」をもっている人が、感染（風邪など）やアレルギー（花粉やハウスダストなど）やストレス（身体的、心理的）などをきっかけとして咳の発作が起きることを咳喘息といいます。

診断は総合的に行います。咳は、就寝前や早朝に多く、気温差や会話や運動で起こりやすくなるのが特徴です。レントゲン検査、血液検査、肺機能検査、呼気一酸化窒素測定などを行います。気道過敏性はヒスタミン吸入検査で測定できますが煩雑であるため治療薬の効果をみて診断することもあります。

治療は軽症の気管支喘息と同じで、気管支の炎症を抑えるための吸入ステロイド薬や気管支を拡張する吸入気管支拡張薬という「吸い込む薬」が中心になります。1週間程度で咳は減りますが、咳が完全に治っても気管支の炎症は残っているのことで治療をやめてしまうとまた咳がで



てきます。症状によりですが、3〜6カ月毎に薬の数や量を減らしていくことが一般的です。最も少ない薬の量でも症状がなければ治療終了を試みますので、3カ月以上は吸入薬を続けることとなります。それでも吸入薬終了後に咳がぶり返してしまう場合はより長期間の治療が必要

です。気管支の炎症を残したままだと、咳喘息からより症状の強い気管支喘息になります。しかし残念ながら気管支の炎症を調べる検査は確立されていません。いつまで治療を続けるべきか、薬をやめても大丈夫かは予測ができないので、治療を進めながら咳の様子で判断していくことになります。

治療に用いる吸入薬の安全性は高いので、診断前の使用や長期治療も安心です。よくみられるのどの副作用（違和感、かすれ声）も薬を替えて

問合先 市民病院（☎76・4131）

information

お知らせ

◆電気設備点検のお知らせ

（病院総務課 76・4131）

市民病院では、電気設備点検を実施するため院内が停電となります。そのため救急車の受入を一時中止します。当日は、他の医療機関をご利用いただけますようお願いいたします。

点検日：11月4日(土)

点検時間：午後1時から午後4時

（予定）

